

京都大学	博士（文学）	氏名	福田 耕祐
論文題目	「古今」・「東西」に揺れるギリシア・アイデンティティーの多面性 －ニコス・カザンザキスの作品分析を中心に－		
（論文内容の要旨）			
<p>本論文は、近現代ギリシア文学を代表する作家であり思想家であるニコス・カザンザキス（1883-1957）が作品を通して提示したギリシア像が、西洋の精神文化の源泉として理想化されたギリシア像とは必ずしも合致せず、非西洋的な要素さえをも含むものであったことを明らかにする。特にカザンザキスが西欧崇拜に距離をおきつつ、極東やロシアでの体験と執筆を通して「東方」を探求することで、従来近現代ギリシアで禁忌とされていたギリシアにアジア的要素を認めるという独創的なギリシア・ギリシア人観を描いていたことを論じる。</p> <p>古代ギリシアは、とりわけ西洋近代の文化的源泉とされてきたため、純粋にヨーロッパ・西方的であってアジア・東方的な要素は含まないものとして位置づけられる傾向にあった。しかし地理的にも歴史的にもアジア・東方とヨーロッパ・西方の中間に位置しており、ビザンツ時代やオスマン時代という歴史を経た近現代ギリシアは、西欧の知識人たちによりしばしば西洋の理想に適さない東方・オリエントに属するとみなされることがあった。このため19世紀中葉以降の近現代ギリシアにおいては、西欧化・近代化を推進して自分たちがアジア・東方に属するものではないと主張する「脱亜入欧」的な議論や、親西方・嫌東方的なナショナリズムの思想が展開される一方、またその反動として過度な西洋化を非難するギリシア中心主義的な思想もあらわれた。</p> <p>しかし、近現代ギリシアの思想家の大半が自分たちの理想とするギリシア像の中から東方的な要素を忌避していたにもかかわらず、ニコス・カザンザキスはギリシアの有する東方的要素を肯定的な形で評価し、古代のみに限定されることのない非西洋世界を含む多様な文化圏に関する考察と思索を含んだギリシア・ギリシア人観を描いた。そして彼は過度な西洋化やギリシア中心主義的なナショナリズムをも乗り越えて、思想的名著『禁欲』で述べられているような世界と人間そして神に関する世界観を生み出し、ギリシアを時間的に古代から現代まで、そして空間的に東西に広がりを持ったものとして、二つの連続性を有する存在として描いた。本論文はこれまであまり顧みられることのなかった、こうしたカザンザキスのギリシア・アイデンティティーのあり方を明らかにする。</p> <p>序章では、ニコス・カザンザキスを取り上げる意義をギリシア思想史及び文学史の観点から指摘する。近現代ギリシア思想史及びギリシア・ナショナリズムにおいては、しばしば自分たちをヨーロッパ・西方の側に位置づけ、ギリシアの中から東方・アジア的な要素を退けようとするいわば「脱亜入欧」ともいえる潮流があり、とりわけギリシア国民史記述や民族意識形成において古典ギリシアや西方・ヨーロッパに高い評価が与え</p>			

られたこと、そして東方・アジアには否定的な評価が与えられたことを確認する。だがこれに対しカザンザキスは、日本やロシアと言った東方に関する研究と旅行を通して、自身のギリシア・ギリシア人観を形成するに際し、先行するギリシア思想史及び文学史の知的前提に反する形で東方・アジア的要素を肯定期的な形で取り入れた、という説の提示を行う。

続く第一章では、近現代ギリシアにおけるギリシア・アイデンティティー問題を論じるための背景として、古代から近世に至るギリシア人の自己意識の変遷について先行研究に基づきつつ概観する。特に、ビザンツ期においてキリスト教がギリシア人の自己意識に深く根ざすようになったこと、また中世においてもギリシア古典文化を継承した自分たちが西方・カトリック圏に対しても東方・イスラーム圏に対しても文化的に優位な立場にあると信じていたことを確認する。加えて、西欧近代の啓蒙主義や人文主義の流れの中で発展した古典ギリシアへの肯定的な評価とアジア或いは非ヨーロッパ世界に対する否定的な評価が生まれた過程を先行研究に基づき整理する。

第二章では、初めに西欧の啓蒙主義に影響を受けて発生したギリシア啓蒙主義について概説する。特にギリシア啓蒙主義の思想家たちによる古典ギリシア崇拝と、ヴォルテールらによって専制として酷評された中世ビザンツ時代への軽視によって形成されたギリシア観について論じる。十九世紀前半には、ドイツのヤーコプ・ファルメライヤーが古代ギリシアと近現代ギリシアの歴史的連続性を否定する見解を発表したが、これに対抗する形でパパリゴプロスに代表される歴史家たちがビザンツ帝国を再評価し国民史に組み込むことで古代から現代までを一直線に結んだ国民史を描くことになった。この過程で、近現代ギリシアが「脱亜入欧」の潮流にあって自分たちを西方に位置づけたがったのに対し、西欧の知識人たちの中には、古代ギリシアから切り離されて表象された近現代ギリシアを東方・アジアに属するものだとみなした事例があったことも指摘する。

第三章では、イオン・ドラグミスを代表とする、過度な西欧崇拝を批判してギリシアそのものを探求しようとした知識人たちの思想を論じる。彼らの思想には、カザンザキスにも見られた過度な西欧崇拝への忌避とギリシアそのものを探求しようという意志、そして特にドラグミスにはロシアを介してギリシアと東方世界を結びつける発想が現れたが、彼らにあっては未だギリシアは完全に西方に属するものであり、ギリシアに東方的なもの、特にアジア的なものを属性づけることは禁忌とされたままであった。

第四章は、カザンザキスの青年期の作品分析を通して彼の思想について論じるとともに、1919年の厚生局での奉職によるコーカサス地方のギリシア人難民たちの本国帰還支援やマケドニア地方への定住運動への従事などを踏まえつつ、カザンザキスの政治活動についても論じる。カザンザキスは当初ナショナリズムと西欧文化、そしてギリシア古典文化に傾倒していたが、1917年には書簡において、自身のアイデンティティーの中にアフリカやアラビアの要素があるという記述を残しているように、ギリシア人としての自身のアイデンティティーの中にアジア・東方的な要素を認めていく萌芽が現れていた

ことを明らかにする。

続く第五章では、ナショナリズムと決別したカザンザキスがドイツとオーストリアに赴き、当地で社会主義及び共産主義に傾倒し始めていった時期の作品と事跡を論じる。この中で、カザンザキスの関心が完全にギリシア・ナショナリズムと決別したことを主に書簡の分析を通じて示すと共に、この時期に描かれた『饗宴』を分析することで、カザンザキスが反西欧崇拝的な思想を形成するようになっていったことと、次章で見る『禁欲』の思想が彼の中心的な思想となっていたことを論じる。

そして第六章では、カザンザキスの思想的著『禁欲』の内容を章ごとに分析し、ここに表現された思想を明らかにする。特に本論文では、カザンザキスに独特な神論である「人間による神の救済」と救済に向けての「上昇」という概念について、ニッサのグリゴリオスを中心にした正教神学の「神人協働」と「参与」、そして「自由」の観念を結び付けながら論じ、従来は西欧哲学やプロテスタント＝カトリック神学との関係で研究されてきた彼の神論が深く東方正教の神学にも結びついたものであることを明らかにする。

第七章では、カザンザキスの三度にわたるロシアでの滞在と、この体験をもとに執筆した作品を分析する。この時期の作品には前章で見た『禁欲』の思想が随所に反映されていること、そして同時期に訪れた中東での体験を通して、カザンザキスの「東方」の意味がより具体的になっていったこと、そしてロシア文学の研究を通して後に彼の作品の中で重要な役割を果たすことになる「民衆」と「大地」の概念を得たことを明らかにする。

第八章は、この時期に刊行されたスペイン旅行とこの時に執筆された『スペイン旅行記』を分析する。前章までに見たカザンザキスの東方の探求の中であって、彼によってスペインがアラビア的な要素を有した東方として理解され、この点でカザンザキスの思い描くギリシアのイメージのひな型の一つになっていることを論じる。特にカザンザキスは、スペインにおいてもロシアやギリシアのように近代化・西欧化か自民族性の追求かというジレンマに陥ったことを指摘し、この中でもミゲル・ウナムーノの「ヨーロッパのスペイン化」という解決策を高く評価し、西欧化に傾倒しないギリシアのあり方を考察していたことを明らかにする。

第九章では、カザンザキスの極東旅行とこの旅行を通して執筆された旅行記『日本と中国を旅して』で描かれた日本像を分析する。この中でカザンザキスは、ロティやハーンの作品に描かれた日本像を踏まえつつ、「心」、「桜」、「富士山」、「不動心」を『禁欲』の世界観に基づく形で表象し、日本を自身の思想に基づく形で描いたことを指摘し、極東旅行が単に物見遊山に終わったものではなく彼の思想の中で一定以上の意味を有するものであったことを論じる。

次に第十章で、カザンザキスに先行するギリシアの知識人たちが忌避とした（古典）ギリシアとアジアを関連付けるという禁忌をカザンザキスが犯し、日本と古典ギリシア

の文化比定を行い、歴史上直接の接点はなかった二つの文化に近似している点を肯定的に描きながら古典ギリシアを描き出していったことを論じる。しかし、当初は反西欧的なものの探求の中で極東に接し、「東方」を軸に親近感を感じていたが、極東で過ごしていく中で白人と黄色人の違いを痛感すると共に、ギリシアの持つ西方性の探求へと関心が移って行ったことも併せて論じる。

第十一章では、カザンザキスのギリシア旅行とイギリス旅行を取り上げ、そしてこれらの旅行を通して執筆された「ペロポネソス旅行記」と『イギリス旅行記』を主に分析する。この中で彼は東方の探求からギリシアの西方性の探求へと関心を移し、地理と歴史、そして哲学的思考の観点からギリシアの有する西方性を思索し、これをヤンプロスやテオトカスといった同時代の思想家たちの思考とは距離を取りつつ「調和」と「均衡」という形で表現したことを論じる。

第十二章では第二次世界大戦期のカザンザキスの作品を分析する。本章ではカザンザキスが戦禍の中で「ギリシア性」として「ギリシアの歴史的連続性」と「ギリシアの有する東西の融合」を提示したことを明らかにする。特に小説『その男ゾルバ』において展開された「ギリシアの有する東西の融合」の思想を通し、フリードリッヒ・ニーチェの「アポロ的なもの」と「ディオニソス的なもの」を用いつつ、アジアでもなければ西欧でもない、単に東と西の間にある国としてのギリシアではなく、「東西の重なり合う領域」であり「まさにギリシア」という地にあるギリシアの特質を描いていったことを論じる。

最後に第十三章では、カザンザキスのギリシア内戦期の動向とこの時期に執筆された『キリストは再び十字架に架けられる』と『兄弟殺し』がギリシア内戦をモチーフにしていること、そして両作品とも『禁欲』の基本思想とプロットをなぞる形で物語が展開されていることを論じる。そして、両作品とも前章で論じたカザンザキスの「ギリシア性」が文学を通して表現されていることを論じるとともに、この「ギリシア性」を体現する媒体としてカザンザキスが選んだのが、古典ギリシアや栄光や富を体現するような成功者ではなく、迫害や戦禍に巻き込まれ同胞からも差別を受ける難民たちであること、そしてこの難民たちが東方に居住するギリシア人であり、カザンザキスの東方性の探求が活かされていることを論じる。

以上をもって終章において、カザンザキスによるギリシアの探求が第二次世界大戦期までに描かれた、「ギリシアの連続性（歴史的側面）」と「ギリシアの空間的東西性（空間的側面）」を内容とする「ギリシア性」の探求に結実したことを論じ、これまでギリシア国内外の先行研究で十分に取り扱われることのなかったカザンザキスのギリシア・ギリシア人観を本研究が明らかにしたことを指摘する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ギリシアの国民的作家と評されるニコス・カザンザキスの作品、特に『禁欲』の分析を主軸に、必ずしも「ナショナリズム」に回収されない多面的なギリシア・アイデンティティーのありようを明らかにしようとした労作である。日本では、また世界的にも研究者層が厚くない現代ギリシア文学研究を進めるため、筆者は2019年から2021年にかけてテッサロニキ大学哲学部の中世・近現代ギリシア学科に留学し、ギリシア語での論文発表等によりギリシア語圏の研究者との議論を重ねるとともに、日本語でのギリシア語・文学研究誌への論文発表や、カザンザキス作品の邦訳などを通じて、研究テーマに関する考察の深化を行った。その集大成としてまとめられたこの論文は、ギリシア語圏および英語圏でのカザンザキス研究の成果を踏まえつつ、ロシアや極東での体験等を通じて変化していったカザンザキスの東方意識についてなどの新規性のある独自の観点も織り込んでおり、総体としてカザンザキスの独特なギリシア・アイデンティティーを説得的に論じることに成功している。

従来のカザンザキス研究は、主に『キリストは再び十字架に』などのキリスト教の根幹を揺さぶる作品を取り上げ、西洋文学や哲学あるいはキリスト教との関係を論じるものが主流であった。そしてギリシア国内では、普遍的なものや汎ヨーロッパ的なものを志向する国際的作家と位置付けられ、彼のギリシア観が論じられることはほとんどなかった。しかし本論文では、カザンザキスの文学作品の中にはナショナリスティックな表現や自民族の特性を探究しようとする発想が確認できることと、彼のギリシア観には東方正教の神学的思想との関係も深いことを指摘しつつ、カザンザキスがギリシアの有する東方的要素を肯定的な形で評価し、古代のみに限定されることのない非西洋世界を含む多様な文化圏に関する考察と思索を含んだギリシア・ギリシア人観を描いたことを論じている。

この議論を説得的に展開するため、この論文の第一部は国内外の研究成果を参照しつつ、古代ギリシアから近代・オスマン統治期に至るギリシア意識の概観と、近現代ギリシア啓蒙主義と民族意識の形成についてまとめている。そしてカザンザキスは、ギリシアの東方性をいかに扱うかという問題意識が生じたのちに、過度の西方文化崇拝を否定する中で、ギリシアそのものをいかに描くかという課題に立ち向かった知識人の系譜に属するわけだが、本論文ではこの第一部でカザンザキスに先行するギリシア人思想家や知識人たちのギリシア・ギリシア人観の形成と変遷についての概観がなされることにより、第二部でカザンザキスのギリシア観の分析が展開する準備が丁寧になされている。

第二部では、カザンザキスの生涯と作品からそのギリシア・アイデンティティーの形成の過程を論じている。それによると、カザンザキスは1900年代よりギリシア性の探求に大きな関心をもっており、パリ留学以降は「メガリ・イデア（偉大な思想）」的なナショナリズムに共感した、古典崇拝や自民族中心主義的なものに傾倒する時期があった。しかしやがて過度な西欧崇拝を拒否しつつ、ギリシアそのものを探求しようとした

カザンザキスは、1910年代後半を境に東方・アジア的な要素を取り入れるようになり、西欧のギリシア観を否定するようになる。このことを筆者は、その反キリスト教的な主張によってカザンザキスに対して使われたscandalizing Jesusという評価と対になる、scandalizing Greeceと評すべき要素が彼には確かにあったと論じた。そして西洋文明に対する二つのscandalizingは、近現代のギリシアで自明視された古代からの連続性を前提にしたギリシア・ギリシア意識とそこから避けがたく生じる西欧へのコンプレックスとその裏返しとしてのアジア蔑視への「処方箋」が含まれるだけでなく、キリスト教と（古代）ギリシアという「『西洋文明』の土台そのものの再検討」と「アジアに対する『人種主義』的な優越意識と差別意識」を解決していくことを可能にすると結論付ける。これはカザンザキスの東方性を取り上げた数少ない先行研究よりも踏み込んだ評価であり、さらにこうしたカザンザキス作品に見られる特徴は、思想的著『禁欲』に現れた東方正教的な宗教観や思想に根ざしていることをも明らかにした点に、本論文の新規性が存する。

ただし本論文にも瑕疵がないわけではない。

まず本論文が論じている「ギリシア・アイデンティティー」が従来のナショナリズムの議論にどのような貢献ができるのかについて、明確に記述がなされていない点である。特にベネディクト・アンダーソンのいう「真実語」にならなかった古代ギリシア語や、近現代ギリシア啓蒙主義の時代の人工的で擬古文的な文語創造、「メガリ・イデア（偉大な思想）」の時期の口語運動などが、典型的な近代的なナショナリズム創造のパターンからずれつつも興味深い事例となっている点への注目や解釈がみられないのは残念である。さらにカザンザキスの思想形成に関しても、ベルクソン、ニーチェなどの影響が言及されているものの、哲学史との接合が十分になされているとは言い難い点も残っている。それはカザンザキスの思想形成期の近現代ギリシア政治史の背景が十分に記述されていないことにも通底しており、この研究が哲学史、文学、現代史の複合領域での文化研究であることに起因しているかもしれない。つまり重なり合う領域の全てに答え得ない中で、説得的な学術的記述を行う困難が反映しているともいえよう。

しかしながらこうした諸点は、今後の筆者の研鑽によって、それぞれの領域に還元されていく可能性として開かれていると考えられる。また総体としての論文による現代文化研究への貢献はすでに十分なされていると評価できる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2022年9月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。